子どもと保育室

大熊米子

何となく冬の続きのように思っていた卒業式から、まだ幾日もたたないのに、四月の声を聞いただけで、このうららかさ。何もかも新しい、何もかも嬉しい、身も心も引き締まるようで、しかも伸び伸びと大気を呼吸している。二、三日すれば、たくさんの新しい子どもたちが、喜びと、好奇心と、そして多少のおそれと緊張とを、その小さいからだに溢れるほどたたえて、この玄関を入って来るのだ。この小さい幼稚園の先生たちは、数々の静かな憩いの後で、また新しくみなぎってくる希望でぴちぴちとした顔を揃えた。きょうは保育室の整備だ。

……

A先生のクラスには、二年保育の子どもたちが、三十人新しく入って来る。A先生はへやの入口に立って、がらんとした室内をみまわした。もうこの間から、暗唱するほど新入児の名前を、下駄箱に書き、めいめいひきだしに書き、帽子かけに書き、手拭掛けに書き、道具類に書き……それで、こうしてへやの中をみていると、いつのまにかその名前がもうめいめいの人格を備えて、へやの中で嬉々として遊んでいるような錯覚を起しそうだ。〝しばらく大きな組の子と接してきた心が、すぐに小さい子どもたちの心を抱きとめられるかしら?……今まではかえって子どもたちが助けてくれたり、引っ張ってさえくれた〟……この休みの間に、A先生は何度かそうした危惧の念とむき合っていた。しかし今、たった今A先生の心はきまった。A先生は、思い切ったように大またにへやの中へ入ると、力をこめて机やいすを片側におしつけた。さあ支度、支度、A先生はいつものきびきびした様子で動き始めた。

小さい子には、きっと畳の感触が懐しいに違いない。家庭の生活から、よちよちと出かけて来た感じの年少組の子どもたちは、きっと靴をぬいで畳の上に上ると、無意識にほっとするだろう。……A先生は、向かい側の物置からえっちらえっちらと畳を二畳運び出して、へやの隅におままごとのお家をこしらえ始めた。茶室用のような小さい座ぶとんも重ねておいた。お人形さ

んの洋服もアイロンをかけてある。一寸角材のヌキをベニア板で挟んだもの二枚をちょうつがいでとめて、芝居の装置のようなかわいいお家が出来る。壁紙はどんなのにしょう。家の前囲いにちょっとした柵を……そうそう額と時計は壁に忘れずに……

A先生は小さな家作りにむちゅうになっている。A先生はこう考えたのだ。〃小さい子どもたちは、当分みんなお母様から離れにくい気持を押さえて出掛けてくるのだわ、これは幼稚園のおうち……私はさしずめここのお母様ね……〃

……

B先生のクラスには、一年保育の子どもたちが三十人、入園式を待っているはずだ。この間面接の時の感じでは、一年の違いというものが、こうも大きいかと思うほど、身体も心も四才の子と比較にならないほどたくましい。しかし、B先生は一年保育の子どもは、一度からを割ればぐんぐん圧倒されるほどの生活力が出てくるにもかかわらず、入園当初は、同時に入園した四才児よりもコチコチに緊張した子どもが多いことを、かねがねふしぎに思っている。どうもからが厚いらしい。家でかわいがられすぎて身心ともに弱いのか、弱いから親が四才では手離せなかったのか、それとも、「自己」が出来すぎてしまったのか……とにかく、出来るだけ早く固いからを破る手伝いをするのが一番よい。それには子ども同志が仲良くなるのが早道だ。そうすれば、すぐに元気な子どもたちの世界が、くりひろげられてゆくに違いない。……B先生は、まずへやの目立たない方の隅に、小さい自分の机を運んで行って、その前に、オルガンをやや斜めに置いて、まるで塀のようにした。そして、思わずフフとひとり笑いをしてつぶやいた。「隠れ家だわ。」B先生は、一年保育で入って来る子どもたちと出来るだけ早くなじみになる為に、〃先生〃はこの隠れ家に押しこめて、自分も餓鬼大将のやや先輩格といったところで身を処していこうと決心している。就学を控えた元気な子どもたちは、なかなか手応えがあって楽しいものだ。B先生は、自分をも含めてこのクラスの子どもたち自身が、出来るだけ生活し易いようにと考えて、へやの中の整備を始めた。粘土や、画用紙、いろ紙などの材料も、絵本、積木、ままごと、マットにいたるまで、出来るだけ手近かに、出しよく使いよくして置けば、だんだん自分たちでいろいろ規律して生活を構えていくだろう。〃お当番さん〃を存分に活躍させてやりましょう……B先生は、だんだん、だんだん際限もなく楽しくなってきた。「フフ、私が餓鬼大将……」もう一度ひとりで笑い出してしまった。

……

C先生は、手伝いの子どもが来るまでにと、むちゅうになって床やガラスをみがきあげている。三月のお休みになる前の日に、この組は、きょうまでは幼稚園の中の小さい組だけれど、この次幼稚園に来る時は、

幼稚園中でのお兄さん、お姉さんになっている……という話から、常日頃皆が憧れている年長組のへやに引っ越すことを話した。どんなおへやにしましょうね？　と問題を投げかけてみると、即座にびっくりするほどはっきりした計画を述べる子がいる。またかわいい童話のお城のようなへやにしたがっている子もいる。皆で話しているうちに、どうしても自分たちが来てお手伝いするから、皆でおへやをよくしようということになった。それでわかったことだが、小さい組の時は、きめられた自分たちのへやがあれば、その中で生活しているだけで、へやのつくりというものには、まるで無関心かと思えた。そこに帽子かけがあるから帽子をかけ、流し場があるから手を洗い、ドアがあれば出入りする……ところが、話し合ってみると、どうやら子どもは、置かれた環境にあまり文句を言わない習慣から、今まで黙ってレディーメードの保育室で生活していてくれたらしい。たいへん申しわけない人権じゅうりんだったと、C先生はすっかり恐縮して、それから子どもを見直して、子どもを相談相手にして、年長組になって一年間暮す保育室のへやつくりをすることに、また新しい喜びを加えたのだった。

「先生、ここ広くあけておこう、おすもうのマットが敷けるようにね」

「先生、ここのカーテン、きれいなのがいいわ、よし子のお家のは、よし子のお洋服と同じなの」

「手拭掛けは水道のわきがいいのね、手がすぐ拭けるから……石けんと、櫛もここね」

「金魚はどこがいい？」

「今に、でんでん虫や、毛虫がでて来たら、皆ここに置きましょうよ、動物園みたいに」

「あっ、けさね、お庭の木にかまきりの卵があったのよ、とってくればよかったわね」

C先生も動物園の飼育課長さんのようなことを思い出した。早速元気なTちゃんが捕獲に飛び出して行って、残った子は動物園の机を動かしてゆく。ある時はぐんぐん仕事をはこび、ある時は皆の話題にする。

〝たのもしいなぁー〟C先生は、去年の四月のことを思い比べて、勝手に出てきそうな涙を、さっきからごくりごくり唾をのみこんでがまんしていたが、ひょっとおもしろいことに気がついた。子どもたちは、たいへん突飛な思いつきでないかぎりは、大なり小なりその自分たちの家を心に描いているらしい。「僕の家ね……」「和子のとこのはね」と言っている。やっぱり自分の家がいいのだ……それなら、この幼稚園のおへやつくり、子どもと一しょにして本当によかった。子どもたちが、本当に自分達のへやと思って親しんでくれるようなへやに出来る……C先生は、額に入れるべく、数枚集めておいた絵をひろげて、「ちょっと、これ見てちょうだい、額に入れるのにどれがいいかしら？」とはずんだ声でかわいい協力者たちによびかけるのだった。